

## 周作人『木片集』訳稿 (四)

### Zhou Zuoren's Mu Bian Ji: A Translation (4)

徐 小 淑\*・山田 史生\*\*

Xu Xiao shu \*・Fumio YAMADA \*\*

#### 要 旨

周作人 (一八八五~一九六七) 最晩年の小品文集『木片集』の翻訳。

#### 唐詩易解

わたくしが古詩を読むさいには原文に就いて鑑賞すべきことを推奨するのは、自分が歳をとっているとか、漢字をたくさん知っているとか、古典文学にくわしいとか、そういうことを自慢したいわけではない。古詩はわかりにくくないからである。不思議なことに、古文よりずっとわかりやすいのである。そのまま書いてあるとおりに読んでゆけば、たいてい読みとれる。古文における面倒くさい文字や文法、もったいぶった言い回し (之乎者也) もない。せいぜい工夫があっても、字を補ったり替えたりして意味をハッキリさせるくらいである。

ためしに唐詩を読んでみよう。李白、杜甫の傑作から二篇をえらぶ。まずは李白の「終南山を下り斛斯山人を過りて宿し置酒す」から。

#### 下終南山過斛斯山人宿置酒

|       |               |
|-------|---------------|
| 暮從碧山下 | 暮に碧山より下れば     |
| 山月随人歸 | 山月 人に随って歸る    |
| 却顧所來徑 | 却って來る所の徑を顧みれば |
| 蒼蒼橫翠微 | 蒼蒼として 翠微に横とう  |
| 相携及田家 | 相携えて 田家に及べば   |
| 童稚開荆扉 | 童稚 荆扉を開く      |
| 綠竹入幽徑 | 綠竹 幽徑に入り      |
| 青蘿払行衣 | 青蘿 行衣を払う      |
| 歛言得所憩 | 歛言 憩ふ所を得      |

|       |              |
|-------|--------------|
| 美酒聊共揮 | 美酒 聊か共に揮ふ    |
| 長歌吟松風 | 長歌 松風に吟じ     |
| 曲盡河星稀 | 曲尽きて 河星稀なり   |
| 我醉君復樂 | 我酔うて 君も復た楽しむ |
| 陶然共忘機 | 陶然として 共に機を忘る |

つぎは杜甫の「衛八処士に贈る」だが、この詩はちょっと長いので、その一部を引く。

|       |                  |
|-------|------------------|
| 昔別君未婚 | 昔別れしとき君は未だ婚せざりしに |
| 男女忽成行 | 男女 忽ち行を成す        |
| 怡然敬父執 | 怡然として父の執を敬し      |
| 問我來何方 | 我に問う 何方より來たるやと   |
| 問答未及已 | 問答 未だ已むに及ばざるに    |
| 驅兒羅酒漿 | 兒を驅りて酒漿を羅らぬ      |
| 夜雨剪春韭 | 夜雨 春韭を剪り         |
| 新炊間黃粱 | 新炊 黃粱を間う         |
| 主稱會面難 | 主は稱す 會面は難しと      |
| 一舉累十觴 | 一舉に十觴を累ぬ         |

いまを去ること千二百年、唐は天寶時代の詩人の作でありながら、いまでも味わえ、しかも原文でそのまま享受できる。これは漢語をしゃべるものの特権であって、よその国ではありえないことである。

文学遺産が豊富であり、おまけに受容も容易である。散文の著作は数百年前にまで、韻文はそれよりさらに早い時代にまでさかのぼることができる。周朝の『詩經』は三千年も大昔のものでありながら、それが

\* 山西大同大学外国語学部日本語講座

\*\* 弘前大学教育学部国語教育講座

読めるのである。三千年前の詩文をいまなお読めるというのは世界的美談ではなからうか。

いささか大袈裟だったかもしれない。韻文はわかりやすいのだが、欠点もある。上記のものは唐詩のほんの数例で、それも盛唐の作品である。晩唐や宋の詩は、いくらかわかりにくい。詩句は平易であるのに、わかりづらいのである。詩の措辞が特殊だからである。たとえば韋莊の「金陵の囚」がそうである。

|         |               |
|---------|---------------|
| 江雨霏霏江草齊 | 江雨霏霏として江草齊し   |
| 六朝如夢鳥空啼 | 六朝夢の如く 鳥空しく啼く |
| 無情最是台城柳 | 無情は最も是れ臺城の柳   |
| 依旧煙籠十里堤 | 旧に依って煙は籠む十里の堤 |

なぜ「六朝は夢のごとく」なのか、なぜ「もっとも無情なのは台城の垂れ柳」なのか。これは別に説明を要する。文字づらのほかに含意があるのである。

## 忌諱による改姓

いにしへの中国人は、自分の名と父祖の名とが同じになることを忌み嫌う（避諱）。笑うべき慣習である。目下のものがそのタブーを犯すと怒鳴りつけられる。友人がうっかり口を滑らせ、父祖の名と同音の字（嫌名）を口にしようものなら、たとえ同音異義の字であろうとも、かならず号泣し、友人を狼狽させる。陸放翁の『老学庵筆記』のなかにこんなことが書いてある。

田登という州の長官は、ひとが自分の名を口にすることを忌み嫌い、忌諱に触れるものがあると激怒した。不注意に口にしてしまつて鞭で打たれた役人は数知れず。そこで州をあげて（「登」と「灯」とが同音なので）「灯」を「火」にいかえることにした。元宵節（上元節）に提灯をかざる放灯の祭りのさい、ひとびとは州にやってくる提灯を見物することがゆるされる。役人は慣例にならつて御触書をつくることになったが、（なにせ「灯」を「火」にいかえざるをえないので）「灯火三日」と書くべきところを「放火三日」と書くハメになった。

登の名を避けるため、灯を火にいかえる。これが「役人は放火しても許されるが、庶民は灯りをとすことも許されない（只許州官放火、不許百姓点灯）」という言葉の典故だとされる。

州の長官ふぜいですら被害甚大なのだから、皇帝さまとなった日にゃ、これが名を忌諱しようもんなら、とんでもない大迷惑なことになる。じっさい多くの字が字画を欠いて不完全なかたちになったりしている。たとえば「胤」という字は右腕がもぎとられ、「颯」という字は両足をうしなうといった類である。

こういうめったに使わない字であれば、ふだんの生活はたいして影響をこうむらない。ところが「玄」という字の場合、康熙帝の名と同音異義だったせいで、「元」に変えられたのだが、意味がちがうだけでなく、発音もまったくちがうから、まるっきり滅茶苦茶になった。たとえば「玄色」とは黒い色であるが、これを「元色」に変えると本来の色になってしまう。また道教がらみの「玄」も「元」に変えられたので、蘇州の「玄妙観」、北京の「崇玄観」といった歴史的に由緒ある「曹老公観」は、そろって名を変えられた。ひとたび名が変えられてしまうと、もとの名にもどすのはむづかしい。いったん「元妙観」「崇元観」とよぼうものなら、口が慣れてしまい、だれも改めようとはしない。やがてそのヘンテコな呼称が定着してしまうのである。

忌諱のせいで姓まで変えられるという、とんでもない目にあつた人物もいる。劉大白は、民国の初年になって。金という姓をようやく劉にもどした。千年も昔のひとである呉越の太祖・錢鏐の諱を避けるための改姓であつたらしい（鏐と劉とが同音）。

二百五十年前、清の雍正帝は、孔子の諱を避けるため、「丘」という姓を一律に「邱」に変えさせ、さらに「幾」と読ませて、きっちり区別することを命じた。いまとなつては、もとにもどして然るべきではなからうか。

紀昀（字は曉嵐）はこんな故事を書きのこしている。乾隆帝のころ、墓地をめぐる訴訟があつた。訴えた片方のものの姓は邱であり、康熙年間の古い契約書をもっていた。それが明確な証拠となつて訴訟に勝つた。ところが敗れたほうは頑として納得しない。県知事はそのありさまを観察するうちに、だんだん疑念が生じてきた。そこで契約書を入念にしらべたところ、それが偽造されたものであることが判明した。その理由は、康熙年間に「邱」という姓のものに土地を売ることにはありえないからである。

『閔微草堂筆記』でその記事を読んだのはずいぶん昔のことだが、いまだに忘れられない。機会があれば「邱」という姓のひとたちに、もとの姓をとりもどしなさいよと云つてやりたい。雍正以前の本をひもとけ

ば、左丘明、丘遲、丘為など、つくりの「阝」がない字はふつうに使われているのだから。

## モチ米

『文滙報』でこんな記事を読んだ。

魯迅の故郷である紹興を視察した作家・艾蕪によれば、酒づくりのための穀類が足りず、紹興はこれまで毎年平均して三四ヶ月分のもを、よその土地からの支援に頼っていた。ところが現在、紹興では穀類が余っている。

この故郷における好いニュースは歓迎に値する。だが、ちょっとだけ誤解がある。穀類の足りない原因が酒づくりにあるというのは不正確で、いささか説明を要する。というのも、紹興酒はモチ米でつくからである。幼いころよく歌った歌謡のなかに、紹興のひとが酔っ払いを嘲笑する歌詞があって、酔態のぶざまさを要領よくあらわしている。

モチ米でつくった老酒を飲んで nyonyo になっちまった。

お仕舞いにくっつけたローマ字は、ふさわしい漢字が書けないからであり、また書いてみても活字が見つからないからである。どういう字かという、ふたつの口の下に典韋の典という字で、『康熙字典』の補遺にはおさめられている。その注によれば「豚を呼ぶ声」という意味らしい。なるほど当たっている。ふつうの発音は「尼(ní)邁(mài)切」だが、紹興の方言では「尼(ní)荷(hé)切」という音になり、まるで異なる。紹興の方言では豚を「nyo」といい、nyonyoというのは親しみをこめた呼び方である。じっさい酔っ払いのイビキときたら、ブタの鳴き声と区別がつかない。

老酒がモチ米でつくられることには、まったく問題がない。幼いころの経験をいわせてもらえば、酒造用のモチ米でつくったお握りを食べたことがあるけれども、正直に言って、ちっとも旨くない。モチ米は精白されていないので、それでつくったチマキ（粽子）はともかく、お握りは旨くない。どうして酒造用のモチ米でお握りをつくったのか、なぜそれを食べさせたのか、当時ちゃんと訊いたわけじゃないので、事情はわからない。

もうひとつ知っている事実がある。酒づくりに使うモチ米はたいへんな量なのだが、それは紹興の地元産ではなく、すべてよそからの輸入である。これは江南地方の長官をながく勤めた友人から仕入れた情報である。やっこさんのほかの話はアテにならないが、これはウソじゃないとおもう。老酒をつくる原料は、すべて江蘇の溧陽からはこぼれており、戦争によって供給が中断され、生産に影響を及ぼしたという。「魯酒薄くして邯鄲困まる」という古語があるが、いまはその逆のようである。

じつをいうとモチ米でつくった老酒は、さほど望郷の念をもよおさせるわけではない。むしろ懐旧の情がかきたてられるのは、ふつうにモチ米を食べるときである。菓子（点心）の主材料は、北方では小麦粉であるのに対して、南方では米、とりわけモチ米である。チマキはいうまでもなく、団子やゴマ餅も、モチ米の粉でつく。菓子屋（糕団舗）のいろんな食べものがそうである。これらによるモチ米の消費もすくなくない。酒づくりに次ぐ量だろう。その供給も、おそらくは隣省に頼っている。紹興でモチ米をつくっているという話は聞いたこともないし、モチ米の田んぼをついぞ見たことがない。

恥ずかしいかぎりだが、米屋でモチ米を見たことがあるだけで、いまでもってモチ米の稲を見たおぼえがない。口いっぱいチマキをほおぼりながら、その材料のモチ米がどのようなものか知らないなんて、じっさい都会人ならではの恥辱だとおもうのである。

## 二人の書家

新聞で散木先生の『藝林談往』の二篇を読んだ。すこぶる興味をそそられ、なにか書きたくなった。だが、わたくしは当代の書画家をひとりも知らない。過去のひとをさがすしかない。おもしろそうなのがふたり見つかった。鄭谷口と傅青主とである。

鄭谷口について、かれの門人の張在辛が『隸法瑣言』のなかで書いている。張在辛は四十一歳のとき鄭谷口について学んだ。

はじめて鄭先生に師事したとき、筆をとって字を書くように命ぜられた。一画を書くや否や、先生は「字はそんなふうを書くものだろうか」というと、みずから坐り、筆をとって身構え、敵の攻撃を防ぐような格好をした。半日かかって一画がやっと、一字を書きあげると数刻あえぐ。なるほどこの先達の

名を成したのが偶然でないことを思い知らされた。

紹興の沈桐生をおもいだした。民国の初年にみずから大書家と称し、門前にでっかい旗をかかっていた。字を書くとき、やたらと力をこめる。一画を書くごとに大声でわめき、足を踏み鳴らす。当時は笑い話として伝えられていたが、あとになってそれがだれのマネかわかった。ただし、谷口の字はのびのびと躍動しているが、沈君の字はひどく鈍重である。大家のやり方のマネをするのもよいが、なにぶん才力には限りがあることとて、かならずしも同じような効果があるとはかぎらない。

傅青主（傅山）は字が「俗っぽさのドレイになる（奴俗気）」ことを忌む。かれの『家訓』にこう書いてある。

字もまた人事・政事といっしょで、俗っぽさのドレイになるのはよろしくない。俗っぽさのドレイにならないためには、ちゃんと勉強して品格を高めねばならない。それは字もいっしょである。

かれは字を書くことの骨法は「できる」を経て「できない」に達することであり、「できない」に至ってはじめて俗っぽさのドレイにならなくなると主張した。たとえば「王字」を臨書する場合、はじめは王羲之の字をとにかく全力でマネする。王羲之と似たような字が書けるようになって、はじめて「できる」という段階である。今度はそこから離脱するように努力する。そうやって「できる」を経て「できない」に達すれば、その書くところの字は、王羲之の字のマネから脱して、ようやく自分の字になってくる。字を書くことが「できる」ようになるのは、さして困難でない。「できる」から「できない」に至ることは、まことに容易でない。だれか一家の字を学ぶと、往々にしてその一家の垂流になってしまう。わたくしの友人に米芾の字を書くのが上手なものがいて、米芾の影響から抜け出せないとボヤいている。もっともな話である。わたくしの目からすれば、その字はたいへん上手いのだが、かれ自身にしてみれば「豁然貫通」した境地には達しておらず、およそ満足には程遠いのである。

藝術を学ぶということには、こういう境涯がある。はじめは核心のところをめざして全力で研鑽し、その境地に到達したら、さらに長い時間をかけて研鑽をつづけ、その境地から抜け出ねばならない。「自ら一家を成す」とはそういうことであり、そうであるがゆえ

に独自の価値をもつのである。

## 灯火読書論

昔つくった諧謔詩（打油詩）のなかに、読書についてのものが二首ある。こんな詩である。

|         |                    |
|---------|--------------------|
| 飲酒損神茶損氣 | 酒は精神をそこない茶は精気をそこなう |
| 読書応是最相宜 | それにひきかえ読書はたいへんよろしい |
| 聖賢已死言空在 | 聖人賢者は死んでも言葉はのこっている |
| 手把遺編未忍披 | ありがたい教えをさっそく読むとしよう |
| 未必花錢逾黒飯 | いくら本代が高くてもアヘンよりは安い |
| 依然有味是青灯 | やはり妙味があるのは清貧の暮らしぶり |
| 偶逢一冊長恩閣 | たまたま長恩閣蔵書楼の一冊にでくわし |
| 把卷沈吟過二更 | 沈黙思考するうちに亥の刻をすぎていた |

これは諧謔詩であって、もとより目くじらを立てるほどのものではない。かつて禁煙して、その代わり本を買ったことはある。これは事実である。酒と茶とは飲みつづけており、その悪習を絶ったことはない。いまや本の値段はそこそこ高いが、アヘン（黒飯・土膏）にくらべれば安い。

ところで、いったい「青灯の味」とはなにか。古人（陸游）の詩に「淡い灯火のもとで書をひもとく趣きは幼いころを彷彿させる（青灯有味似儿时）」とある。出典はこれだとして、その「青灯」とはどういうものだろう。似た言葉に「紅灯」があるけれども、これは赤い灯火、つまり赤い布や紙を糊で貼りつけた灯籠に火をともして全体が赤くなるものである。青灯はそれとちがいで、灯火の光そのものをいう。

「紙窓竹屋のうちにあって灯火のもとに時をすごすのには、すこぶる佳い趣きがある」と蘇東坡はいう。灯火が趣きぶかいのは、それが読書のための灯りだからだろう。菜種油を陶器の皿に満たし、灯芯をひたす。そこに火をともしれば澄みきった肌寒さをおぼえ、寂寥の感をもよおす。書を読むによく、俗を忘れるによい。この蘇東坡の感じ方は、「幽霊がやってくる

灯火の光が青くなる」という俗説と通ずるものがある。してみると、これは蠟燭の灯りであっては具合がわるい。また灯火は蔽われていてもならない。その光は露わな裸であらねばならない。ある夜、蘇東坡が仏典をひもといていると、灯芯がはじけて火花が飛び、それが書に落ちて「僧」という一字を燃やしたという言い伝えがあるが、昔から灯火が剥き出しであった証拠である。

どういふ油を使うかということにも関係があるかもしれない。たいてい菜種油が使われたとおもうが、別の植物の油を使えば光の色も変わるだろう。しかし、この問題については、いまここでは多言を要しない。いずれにせよ、この青灯の趣味については、菜種油の灯火のもとで書見をした経験をもつものには首肯できるところだろう。いまや電灯である。ずっと便利になったが、光の味わいがちがう。青い笠をかぶせて、光の色を青に変えてみても、やはり味わいはいっしょでない。だから青灯という語を現代の文章のなかで使ってみたとところで、どうしても味わいが落ちる。本格的な詩で使われようが、諧謔詩で使われようが、味は落ち、色は減る。これは致し方ないことである。幸か不幸か、わたくしは灯火のもとで読書をするという趣味について説明したいだけである。こういう些細な問題にかかざらう必要はない。というわけで、この問題はこれくらいにしておく。

聖人賢者の遺編のなかで代表的なものといえば、孔子および孟子の書である。それに加えるとすれば、老子および荘子であろう。長恩閣は、大興の傅節子の書齋の名である。かれの蔵書は巷間に散佚したが、わたくしも幾巻か有している。もとより自慢することではなく、ことさら吹聴する気もないのだが、ひとつだけ仔細が存する。わたくしが有するのは『明季雑誌』と題せられた二冊の抄本である。傅氏は明末の歴史を熱心にしらべていた。そのことは『華延年室題跋』二巻に書かれるところが多く明末の史実であることから見てとれる。わたくしが有する小冊子は、もっぱら当たり次第に抄録しただけのもので、まとまった書には成っておらず、たいした価値はない。ただ、いささか感ずるところはある。明末の史実といえば、いまを去ること三百余年の昔ではあるが、アヘン戦争、洪秀全・楊秀清の太平天国の乱、義和団事件といった諸事変のことを考えると、わたくしは思慮ぶかい人間ではないけれども、さすがに沈思黙考せざるをえない。はじめのうちは冊子を手にもっていたが、そのうちに巻を閉じてしまった。「亥の刻を過ぎていた」とうたう

のは、詩ならでは飾った言葉づかいである。

二首の諧謔詩は、どちらも読書についての詩である。読書の快樂をことさら鼓吹するつもりはないが、俗世の憂さを晴らすには、たぶん読書が最適だとおもっている。ところが、かならずしも結果がよろしくない。読めば読むほど懊悩してしまう。わたくしの長年にわたる濫読の経験によれば、読書によって得られることは、ふたつである。よいことは、たいてい本に書いてあるが、ひとつも実現したためしはない。わるいことは、世間にいくらでも転がっているが、本にはすこししか書いていない。昔々、インドの賢者は、惜しげもなく布施をして、ようやく半分の詩を得た。わたくしは二首の詩を得ている。すでにお釣りがきいていってよい。詩の意味は、やや消極的にすぎる気味があるけれども、それは真実から出たものであるから、なにがしかの道理が存するはずである。このことについては後述するであろう。

聖人賢者の教訓は、いまとなっては無用無力である。こればかりは致し方ないことである。古今東西、例外なくそうである。英国のドーソン（陀生）がギリシア古代宗教と現代民俗とについての本のなかで、こう書いている。

ギリシア国民は大勢の哲学者の浮き沈みに出合いながら、もっぱら世襲される宗教にばかり目をむけてきた。プラトン（柏拉図）、アリストテレス（亜里士多徳）、ストア（什諾）、エピクロス（伊壁鳩魯）の学説は、ギリシア人の眼中にはないかのである。ただし、ホメロス（荷馬）およびそれ以前における多神教は生きつづけている。

友人に宛てた手紙のなかで、欧州の現状について、スペンサー（ス賓塞）はこう書きしるしている。

二千年にもわたって愛の宗教が喧伝されてきたにもかかわらず、依然として憎しみの宗教が幅を利かせている。キリスト教徒をよそおいながら欧州に住んでいる二億人の異教徒（外道）にむかって、おのれの宗教の教義にもとづいて行動しろといたりしたら、きっとブン殴られるだろう。

ギリシア哲学者もキリスト教徒も、しょせん他国のことではあるが、わが国の孔孟、老荘、ひいては仏教も、実情は似たり寄ったりである。かれこれ二十年もまえのことになるが、一篇の小文をものしたことがあ

る。それは教訓の無用ということについての、それなりに興味あふれる文章だとおもっているのだが、その末尾にはこう書いている。

たしかに実在したのは事実である。ギリシアのソクラテス（蘇格拉底）、インドのブッダ（釈迦牟尼）、中国の孔子・老子、かれらは聖人としてあがめられている。だが、いまどきの当該国民にとって、かれらは存在しないも同然である。これは当然のことだろう。べつに意味もなく哀悼するいわれはない。ただ、もしこれらの偉人がかつて存在しなければ、現在のわれわれは想像を絶するくらい寂しいだろう。かれらの言行がいまもって伝えられており、知識および趣味をもったものがそれを欣賞できるということ、それはよろこばしいことである。

いくらか自嘲気味に書いているが、あれから二十年の春秋を経て、すくなくならざる経験を積んだにもかかわらず、いまだに満足しているというには程遠い。無論、ベッドに寝転んで夢見心地になりながら、こういう希望が実現するなど甘いことはおもっていない。わたくしが云いたかったのは、濁世にあって聖賢の遺教をひもとくとき、そこはかたなく聖賢の寂寞たる想いがわかるような気がするということである。

余計なことを書いたようではあるが、わたくし自身にとっては大切なことであった。廃名に宛てた手紙にも似たようなことを書いたことがある。要するに、ガッカリ（悵惘）という気分があるもので、どうしても世間にむけて世話を焼きたくなるのである。ひどく気は重いのだが、さりとて捨てて顧みないでいることもできない。

「閉戸読書論」は民国十七年の冬に書いた文章である。もってまわったような書きぶりをしているが、自分では気に入っている。そこに書いたことは正しく、いまでも通用するとおもっている。そこで論ぜられているのは史書の繙読のすすめである。その要旨はこうである。

わたくしは終始変わらず「二十四史」は好ましい書物であると信じている。それは懇切丁寧に教えてくれる。われわれの過去はこうであった、現在はこうである、将来はこうであろう、と。歴史がわれわれに教えてくれるものは、表面的には、ただ過去のみである。しかし現在および将来もまたそのなか存する。正史はまるで先祖の神像のようであって、こ

とさら莊嚴に描かれているけれども、どう描かれようとも子孫の面影がかならず見いだされる。野史ときたら、さらにもっと面白い。それは行楽図やスナップ写真のたぐいだが、まさに遺憾なく真相を保存しており、それを見るものをして卓をたたいて絶賛せしめ、かつ遺伝の神妙なるを歎ぜしめずにはおかない。

史観といってよいかどうかは知らないが、わたくしなりに説明させてもらえば、ここには暗くかつ新しい宿命観がただよっている。そのことは透徹した眼識でもって見るならば、かならずや悟られるべきものである。もっとも、わたくしはただガッカリ（悵惘）しているだけで、およそ真の懊惱には至っていないのかもしれないが。

明朝といえば、魏忠賢および客氏のことを真っ先におもわれ、張獻忠、李自成のことが浮かんでくる。連中のことはどうでもよい。しょせん宦官（太監）ないし匪賊（流寇）にすぎない。忘れてならないのは、国子監に学びながら魏忠賢なんぞを孔子廟にまつべしと提言した陸万齡、東林党から魏忠賢の閹党にうつり、清軍を福建（閩）にひき入れた阮大である。『詠懷堂詩』や『百子山樵伝奇』をひもとけば、おそろしさで身の毛がよだつ。

史書とは医者のカルテのようなもので、病気の原因と結果とが歴々と書きしるされてある。すぐさま医薬を処方して、ただちに病根を除去することはできないとしても、せめて自肅自戒して病気を再発させないようにうながす契機にはなるだろう。運がよければ、なにかしら衛生・保健の方法を見つけられるかもしれない。

史書を読んで得るところはなにかと問われても、うまく答えられない。ひとつは消極的な警戒心だろうか。ひとをオオカミに化けさせないようにできるとすれば、得られることのひとつに数えてもかろう。積極的なものもすこしはある。たとえば、政府は人民を不安にさせてはならず、士大夫は結社をつくってはならず、また学問を研究してはならない。これらは多大な不幸のあったせいであることが実証されているが、いずれにせよどこにでも転がっているありふれた世間話でしかない。ところが、ひとたび聖賢の話としてでっちあげられようものなら、いつまでも実現されない絵空事になってしまう。事ここに至り、史書の記載と聖賢の教えとは、どっちもどっちの似たものになる。かくして史書を読むことと聖賢の言葉（経子）に触れる

こととは、ひとつのことで貫かれる。これはこれで好ましい読書のやり方である。

ひとに読書をすすめるさい、古人はしばしばその面白さ（樂趣）を説く。たとえば『四時読書楽』に説かれるように、読書はたいへん気持ちのよい（楽楽陶陶）ものである。かつて諳誦した詩句をおもいだすなどというのは、はなはだ愉快である。

あるひとは読書の有益さを説く。たとえば「書物のなかには黄金の家があり、書物のなかには美貌の女がいる」というのは、偉くなって金持ちになる（升官発財）ことをめざすものの説くところである。「原道」をあらわした唐の韓文公が、わが子を教えるのに立身出世主義者の所説をもってしたことからも、この考え方が世間でいかに大きな勢力をもっているかは推して知るべし。

わたくしの考えは、このどちらともちがう。あえて説明をもとめられれば、「自分の教養のために本を読むのだ」と答えるだろう。たいして快樂はなく、そんなに利益もない。得られるのは、わずかの知識のみである。おまけに知識とは苦しみでもある。すくなくとも知識はいくらか苦味を帯びている。いにしへのヘブライ（希伯来）の伝道者はこう語っている（『旧約聖書』「コレヘトの言葉」1）。

わたくしは知恵、狂妄、愚昧について熱心に考察したが、それは風をつかまえようとするようなしわ

ざだと知った。なぜなら知恵が深くなれば憂愁も深くなり、知識が多くなれば苦痛も深くなるのだから。

この所説はすこぶる的を射ている。とはいえ、苦しみと憂いとは、じつをいえば教養の一種なのではなからうか。風をつかまえようとするような与太話であろうとも、まるっきりナンセンスということはあるまい。わたくしはこんなふうにしたことがある。

同類の狂妄と愚昧とについて考察することは、個人の老死病苦について考察することであり、いずれも偉大な事業である。虚空はあるがままに虚空であらしめればよい。虚空であると知りつつも、ひたすら追跡しつづけ、それを洞察しようとすることは、はなはだ有意義なことである。じっさい風をつかまえようとするように偉大なことである。

このように書いてくると、わたくしの読書論は、じつは諧謔詩にあらわれているほど消極的なものでもないような気がしてくる。とはいえ、そこはかとなく寂寞の感をまぬがられないことは如何ともしがたい。ただ寂寞によく耐えうるもののみが、この道を歩きつづけることができるのである。

(2016. 8. 8 受理)